

失語症者と情報保障

—意欲の側面からの検討—

小谷 朋子

(首都医校／コミュニティ福祉学研究科 博士課程前期課程 2008 年修了)

はじめに

情報の入手が困難な人への支援の方法に「情報保障」がある。情報保障は、多様な手段を用いて、情報の受け手が確実に情報の内容を受け取することを保障することである。情報保障は、情報入手困難の理由によって大きく方法論が異なる。また、情報呈示のあり方も時代によって大きくめまぐるしく変化していく。情報保障には多くの側面できめ細やかな対応が求められる。

本稿は、筆者が2007年度に執筆した修士論文「失語症者と情報保障—意欲の側面からの検討—」を加筆修正したものである。失語症は、脳損傷を原因とする言語機能の中途障害で、言語機能全体に障害が現れる。聞こえているし、見えているのに、「言葉の意味が理解できない」という状態が起こる。

本研究の目的は、近年の文書による説明や契約など重要な文書が文字で示されることに注目し、失語症者への情報保障の有効な方法を明らかにしようとすることである。従来、読解を促進する書式の検討は海外での論文が多い。本研究は日本語話者の情報入手の「意欲の促進」に焦点を当てた。本稿では、意欲を高めた上で理解しやすい文書のレイアウトを検討する方法について考察する。

I 失語症と情報保障

1 失語症の医学的背景と社会復帰における問題

(1) 失語症の医学的背景

失語症は、脳血管疾患などの脳損傷を原因として起こる言語障害である。記憶障害、注意障害などその他の高次脳機能障害、あるいは認知症とも区別される。失語症は、言語の表出面と理解面の双方に障害が起こる。大脳の言語野の損傷された部分、あるいは損傷の大きさなどによって、現れる症状と重症度は異なってくる。

原因の代表的なものは、脳梗塞、脳内出血などの脳血管疾患、交通事故などによる外傷である。わが国においては、脳血管疾患は長らく死亡原因の第3位であり、一般市民に認知度の高い疾患である。全国に30万人とも50万人とも言われているが正確な人数は把握されていない。

失語症は発症初期には急速な回復をみせる。また、一般的に失語症が身体の麻痺よりも長期にわたり回復を認めることも知られている。リハビリテーションは、日本では言語聴覚士（以下ST）が、医療機関、障害福祉関連施設、介護保険関連施設などで実施するが多い。

(2) 失語症が生活に及ぼす影響

<身体障害者手帳>

N氏は、脳梗塞発症後10年以上経ち、上下肢の麻痺と視野障害、中等度の失語症が後遺症として残存、身体障害者手帳1級1種を所持している。彼に上記の3つの障害の中で一番大変な障害はなにかと尋ねたところ、「失語症」と答えた。しかし、彼は、交通機関が半額になる理由が失語症とは関係ないことや、失語症だけでは最大3級にしかならないこともつい最近まで知らなかった。このようなことは臨床場面よく聞く話だ。

失語症単独で取得できる身体障害者手帳は、「音声言語障害」の3級と4級のみである。一方、聴覚障害には、2級から6級の身体障害者手帳が交付される。木村ら（1991）は、実用コミュニケーション能力検査簡易版を用いて、身体障害者手帳2級の聴覚障害者と3級の失語症者のコミュニケーション能力の成績を比較した。その結果、「(略) コミュニケーション能力、言語情報の把握、ハンディキャップの援助体制という3点から比較した時、身体障害者福祉法において障害程度等級が2級の重度聴覚障害例に比べ、より等級の軽い3級の重度失語症例のほうが日常生活でのハンディキャップが大きいことがわかった。」¹⁾と述べている。

2006年にNPO法人コミュニケーション・アシスト・ネットワークが実施した調査では、回答した失語症者の8割以上が身体障害者手帳を取得しているが、言語障害の判定を受けている人は4割程度だった。さらに、身体障害者手帳を取得していない人の3割は、身体障害者手帳の制度そのものを知らないという結果であった。

<日常生活の変化>

失語症者のほとんどは成人である。2002年に報告された「失語症全国実態調査」によると、退院後に職業復帰するのは失語症者全体の8%にすぎず、さらに、現職復帰はその半数に満たないことが明らかになっている。

全国失語症友の会連合会東京支部は、2002年に都内の失語症者にアンケート調

査を実施した。回答数は265名である。失語症者に直接STが質問し回答を得た。この調査の結果、失語症になった後は、重症度と関係なく病前からの友人と会わなくなるなど付き合いが変化する傾向があることが明らかになった。また、移動に関しての問題がなく、失語症が軽度でも、ATMの使用や役場での手続きが困難になったり、初めての場所には1人で行かなくなったりしていた。失語症が軽度で多少の不自由さがありつつも他者とのコミュニケーションが成立する状態でも、失語症者は外出や何気なく行われる日常のやり取りに消極的になるということが、この調査から分かる。

<障害者総合支援法>

平成25年施行の障害者総合支援法では、附則第3条の検討規定に、法律施行後3年を目途として、「手話通訳等を行う者の派遣その他の聴覚、言語機能、音声機能その他の障害のため意思疎通を図ることに支障がある障害者等に対する支援の在り方」²⁾について検討を加え措置を講じるとされた。失語症者への具体的な支援について働きかけるチャンスであろう。実際に初めて失語症者が自ら市に掛け合いに行ったケースでは、そもそも失語症とはどんなものか、他の自治体はどうしているのか、と担当者から質問されたとのことであった。当初の想定は、「手話通訳」「要約筆記」が中心であり、「言語障害」という言葉が入っていても実際の行政の窓口レベルではそれがどんなものか想定されていなかった様子だ。千葉県「障害のある人に対する情報保障のためのガイドライン」(2009)では、13種類の障害について9つのグループにわけ障害の特徴と支援の方法をまとめている。失語症が含まれる言語障害は、発声機能の障害である音声機能障害と同じグループとしてまとめている。聴覚障害が9ページわたって解説してあるのに対し、音声機能・言語機能障害のページは2ページである。

2 わが国における失語症者への情報保障の現状

失語症者の情報獲得を支援する方法として近年注目されつつあるものとして、失語症者の会話を支援するボランティア、通称「失語症会話パートナー」がある。「会話を支援する」とは、「失語症に関する正しい知識をもち、適切な会話技術を用いて、失語症者の不自由なコミュニケーションを補いながら会話をする」³⁾ことである。適切な会話技術の内容としては「文字を書いて一緒に示す」、「絵や文字、地図、カレンダーを用いる」、「失語症者の言った内容や応答の内容を確認しながら進める」⁴⁾などである。これは、1990年代後半にカナダのKagan (1998)らが提唱し、イギリス、オーストラリアなどで注目されたものである。日本でも2000年ごろから養成が始まり、関心を持った各地のSTを中心として徐々に広がりを見せた。2014年の段階では、少なくとも全国で20の団体が養成を行ってい

たか現在も行っている。活動主体は任意団体、市、県の言語聴覚士会である。活動内容の中心は主に失語症者のグループでの会話の支援である。

3 失語症者の文字情報へのアクセシビリティの研究

海外での失語症者の文字情報へのアクセシビリティを向上するための条件の研究について、Brennan (2005) の報告をまとめると表1のようになる。

表1 失語症者に易しい文書スタイルの要素

	肯定的要素	否定的要素
イギリス 失語症者支援団体 Connect (The Communication Disability Network)	語彙の選択 文法の複雑さ 文字サイズ 書式と量 絵の利用 レイアウト	
オーストラリア クィーンズランド大学	単純な語彙と短い文 大きい標準的なフォント 余白の追加 適切な絵の利用	
Roseら (2003)		体裁の変更で小冊子全体が冗長になる イラストの多用に全体の50%が拒否感
Elmore-Nicholasら (1981)	イラストを添えて聴覚的な理解が改善した	
Waller		イラストは聴覚的理解に影響しない
Devlin	長く複雑な文章の短縮 受動態の能動態への変更 代名詞が指し示すものの明示化 普段使用しない語のよく使用する語への置換	
Beesonら (1998)	文法的な句の間の空白部分の増加により、文章を理解できている間は失語症者の読む速度が上がった	

Rose (2003) らは、レイアウトの変更が効果的なのが中等度の失語症者なのは、軽度の失語症者にはこれらの変更がそれほど必要ではなく、重度の失語症者はこれらの変更をしてもなお読解が困難なほど障害が重かったからではないかと考察している。

海外では、上記のように、すでにある程度共通の「失語症者に易しい」文字情報の提示の仕方が提案されてきているが、未だに見解が分かれているものもある。また、失語症者に易しく作った文書を必ずしも失語症者が好まないという問題についての検討は未だになされていない。

また、以上はすべて英語圏の研究である。言葉の問題は言語の特徴や文化的背

景と切り離すことが難しい。例えば、漢字とかなの2種類の表記があるのは日本語独自の特徴である。他にも、縦書き・横書きの併用、ルビも日本語独自の特徴である。

II 調査：「外見の変更」による「読む意欲」の変化

1 目的

本章では、失語症者の文字情報へのアクセスの意欲を促進するレイアウトについてアンケート調査を通じて検討する。

2 サンプル記事の「外見の変更」の条件

(1) 参考にする先行研究

Brennan (2005) らは、9人の失語症者（中等度～軽度。英語話者）に対して、従来知られてきた文書のレイアウトの条件の中で最も有効な変更方法は何かを明らかにするために、レイアウトの違いによる理解度の変化を調べた。調査で用いた条件は以下のとおりである。

条件：

- セット1 対照群
- セット2 語彙と構文を単純化（Devlinらの原則を利用）
- セット3 Arial 24ポイント（字を大きくしたもの）
- セット4 行間の幅の増量
- セット5 図の使用
（マイクロソフトクリップアートかグーグルの画像検索を使用）
- セット6 2～5までの全条件（「失語症にやさしい書式」）

最も有効だったのは、語彙と構文を単純化したもので、以下、文字の大きさを拡大したもの、全ての条件を利用したもの、行間の順であった。図の利用は、正解数が増加する傾向があったが、統計的には有意な差は認められなかった。

行間の変化が、有効だったことは、Beeson (1998) の先行研究を支持したものであったが、Beesonの研究は句の間の余白をおいたものであり、厳密には条件が異なっていた。

図の利用が効果的ではなかったことについて、Brennanは以下のように考察している。

- ①絵が具体的でなかったために失語症者にわかりにくかった。
- ②読み手が絵を好まなかったために、じっくり読まなかった。

- ③ 選択肢には絵をつけなかったもので、選択肢を理解できなかった。
- ④ 絵の示すところがはっきりせず不適切だった。(その文のために書かれた絵ではない)
- ⑤ 絵によって、単に文中のキーワードとなる名詞や動詞を表わした場合と、文意の鍵になる考え(“idea”)を示す場合があった。

本研究では、この研究で用いられた条件を参考にして調査を実施する。

(2) 追加する条件：機関紙の読後アンケートから

筆者が所属しているNPO法人「言語障害者の社会参加を支援するパートナーの会和音」の機関紙「和音通信」第3号別刷「失語症者に分かりやすい要約版」(以下「機関紙」とする)を、STが経験的に失語症者に分かりやすいと思った方法を用いて紙面を構成し、アンケート調査を行った。

調査に協力したのは、失語症者36人。所属、重症度、失語症のタイプ、性別、教育歴などは不明。STが失語症があると判断した人に、機関紙を紹介し質問紙を用いて一人ひとりから回答を聴取した。

編集担当者が考慮したレイアウトの特徴は、以下のとおりである。

- ・字を大きくした
- ・大事な所を太字ゴシックにした
- ・小見出しをつけた
- ・行間を広くした

その結果、

「どの特徴が一番良かったか」という問いに対して、複数選択による回答を求めたところ、以下の順で回答が多かった。(図2)

- 1位 大事な所が太字
- 2位 字が大きい
- 3位 小見出しをつけた
- 4位 行間を広くした

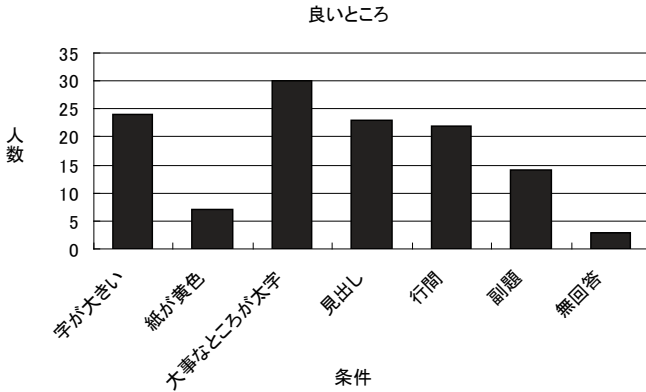


図2 機関紙の見た目で良かった所

この結果を考慮し、本調査の条件に「キーワードを太字にして目立たせる（強調）」を追加する。

(3) 追加する条件2：日本語の特徴を考慮した条件

ST 5名に「日本語独特の書き方の特徴」という質問をして上がった条件 a)「縦書き・横書き」、b)「ルビ」、c)「漢字・かな」の3項目を検討した。

a) 縦書き・横書き

プレ調査として、中等度～軽度の失語症者6人に文書の見た目についての好みを判断する調査を行った。レイアウトの条件は、前述のBrennanの調査の条件にほぼ準拠した以下の4条件である。

- ・フォントサイズ拡大
- ・行間の幅を広げる
- ・文節と文節の間に空白をいれる
- ・コントロール群

それぞれを縦書きと横書きで提示し、計8パターンのサンプル記事を提示した。回答者は、「読む気になる」順に1位から3位まで順位をつけた。

結果は図3に示すとおりである。

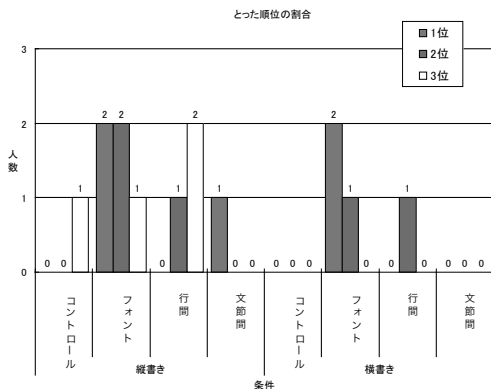


図3 プレ調査：読む気になる順位

この調査においては、横書きを選択した人は縦書きに比べて少ないが、その他の条件のほうが、縦書きか横書きかよりも影響が大きいことがわかった。(表2) 今回は、広報誌でよく見る縦書きを採用することにする。

表2 プレ調査の獲得順位の平均

条件		順位の平均
フォント	縦	1.3
フォント	横	2
行間	縦	3.3
行間	横	3.6
文節間	横	5.3
文節間	縦	5.6
コントロール	横	6.6
コントロール	縦	8

b) ルビ

失語症者へのルビの有効性は今まで検討がなく、前述の「機関紙の読後アンケート」の自由回答でも「ルビが必要」との回答があった。ルビを条件に加える。

c) 漢字・かな

失語症者は、漢字も用いた方が理解しやすいことは、先行研究から知られている。したがって本研究ではこの点について言及しない。

(4) 削除する条件：フォントの大きさ

高齢者に読みやすいフォントサイズに関する先行研究では、葉袋のフォントに

14ポイントを推奨している。今回は、市町村で発行している広報を本調査での素材として想定しており、現行より大きく、広報のフォントサイズとして現実的と考えられた12ポイントを採用した。

(5) 本調査の条件

以上から、調査の条件は表3のとおりとする。

表3 調査の条件

	条件	表示	図	行間	文節間余白	キーワード強調	ルビ
1	図有り	図有り	有り	15pt	無し	無し	無し
2	図なし	図なし	無し	15pt	無し	無し	無し
3	行間変更	行間	無し	30pt	無し	無し	無し
4	文節間にスペース	文節	無し	15pt	有り	無し	無し
5	キーワード強調	強調	無し	15pt	無し	有り	無し
6	ルビあり	ルビ有り	無し	15pt	無し	無し	有り

「外見の変更」は、条件同士を組み合わせた場合の相乗効果が期待されるが、今回は回答者の疲労を考慮し、単独の条件下で調査を実施する。

(6) 調査に用いるサンプル記事

高齢者の日常生活に関する意識調査（内閣府）では、高齢者（60歳以上の男女）の高齢者向け情報の情報源の第1位は「役所、自治会の広報誌」であり、この年齢層は多くの失語症者があてはまる。このことから、本調査では広報誌からサンプル記事を得た。実在する某市の広報誌の紙面を改編したものを上述した5つの条件に改編してサンプル記事カードとして用いた。

図4に、実際に使用したサンプル記事カードの1例を示す。はがき大サイズの厚紙に印刷したものを使用した。注目すべき記事を示すために当該記事以外の部分は灰色で網掛けした。



図4 使用したサンプル記事カードの1例：条件「図有り」

3 調査の方法

(1) 対象者及び調査期間

失語群の対象者の条件は以下のとおりである。

- ①失語症があるとSTが判断した人
- ②発症後6ヵ月以上経過している人
- ③明らかな視覚的認知の問題（視野障害、無視）がない人

上記の条件のうち、②は、失語症の症状がある程度落ち着いてきた時期と考えられるからである。

調査は、協力が得られたST（以下協力ST、21名）を通じて、各自が連絡を取れる①から③に該当する失語症者に対して調査を実施した。協力STは、主に都内に勤務するSTを中心に構成されている勉強会のメーリングリストを通じて調査への協力を依頼した。

失語症者の個人情報、担当のSTに、各個人の失語症のタイプ、重症度、標準失語症検査（以下SLTA）の「読む側面」の結果、発症時期についての情報提供を依頼した。

非失語群として、年齢をマッチングした脳損傷の既往の無い者に同様の調査を行った。

対象者全員に、調査と同時に、年齢、性別、及び広報誌と新聞を読む習慣（読む頻度、読む量）についてのアンケートを実施した。

調査は、2007年10月から11月に実施した。

(2) 手続き

普段、広報誌や新聞を読むときに眼鏡や拡大鏡などを使用している場合は、それらを使用した状態で調査を実施した。

対象者は、各条件に従って改編された広報誌のサンプル記事の6種類の中から、

- ①「一番読む気がする」「一番好き」「最初に手を伸ばす」と感じるものを1枚、
- ②「まったく読む気がしない」「一番嫌い」「絶対手を出さない」と感じるもの1枚を選択する。調査の指示に関しては、上記に挙げたように、説明に使用する用語を指定し、それをういて各担当のSTが対象者に分かるよう説明し、対象者が指示を理解できないと判断した場合は対象から除外した。

4 結果

(1) 対象者の内訳

対象となった対象者の者の人数、性別の分布は下記の表4のとおりである。

表4 性別と失語群・非失語群の分布

		失語・非失語		合計
		失語群	非失語群	
性別	男性	105	27	132
	女性	46	28	74
合計		151	55	206

性別の比率は、従来の失語症者の性別の分布と大きな差はみとめられなかった。平均年齢は、失語群62.19歳（20～85歳）、非失語群60.38才（22歳～83歳）で両群に有意な差は認められなかった。

失語症のタイプの分類は、今回はブローカ失語が全体の56.9%を占めた（図5）。ブローカ失語（運動失語）は、発話が少なく言葉がでにくい印象が強いが、理解の障害が発話の出にくさに比べて軽い印象を受けやすい。ウェルニッケ失語（感覚失語）は流暢に話す、言い誤り（錯語）が多く、理解障害も重い印象を受けるタイプ。健忘失語は、いわゆる一般的な「ど忘れ」の様に、物の名前がさっと出てこないことが非常に多い。しかしブローカ失語のように訥々としか話さないという印象は薄い。理解障害は比較的軽度なことが多いが、中等度程度の人もいてやや個人差がある。タイプ別の人数は「全国実態調査」（2002）では、運動失語34%、感覚失語17%、健忘失語13%という結果であった。今回の対象者については、ブローカ失語の多さが目立つ。ウェルニッケ失語や健忘失語の割合は、比較的「全国実態調査」と同様の傾向を示していた。その他のタイプは、比較的少ない傾向にある。タイプ毎の年齢・性別の分布は有意な差を認めなかった。

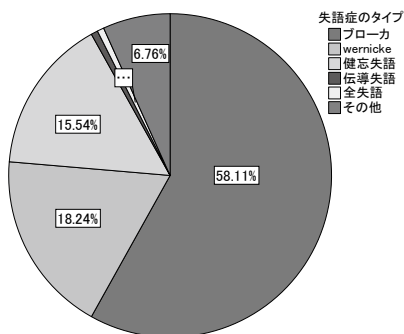


図5 失語症のタイプ

失語症の重症度については、アンケート調査を行ったSTが、失語群の対象者それぞれについてGoodglass（1975）の失語症重症度評定尺度に基づいて判断した。重症度の分布は図6のとおりである。重症度0が最重度であり「実用的な話

し言葉も理解できる言語もない」⁵⁾ 状態。重症度5が最も軽度で、主観的な困難さのみである状態である。

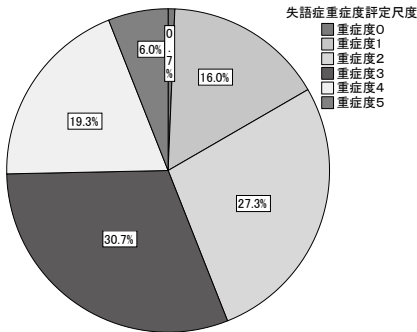


図6 失語群の重症度の割合（失語症重症度評定尺度）

この失語症重症度評定尺度は、主に話し言葉や会話面に視点を置いた評価であり、読む側面の障害を反映していない。日本語の成人失語症者向けの読解のみの検査はない。そこで、臨床場面で普及しているSLTAの読解の下位検査を参考にした。結果的に失語群147名のうち98名の失語症者のSLTA<読む>のデータが得られた。読解に関する下位検査4つの得点と重症度はいずれも相関を認め、最も相関が強かった検査「書字命令」で、相関係数は0.746 ($p < .01$)であった。

以上の結果から、本調査では、失語症の重症度を検討材料とする際は、失語症重症度評定尺度に基づいて検討することとする。

<失語症の重症度とタイプ>

各失語症タイプ毎の失語症の重症度を図7に示す。

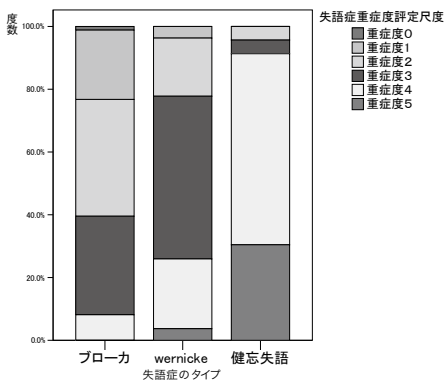


図7 重症度毎のタイプ分類

今回の失語群の傾向としては、ブローカ失語は他のタイプに比べて比較的重度な人が占める割合が多い。また、健忘失語は、逆に軽度の人が多い。

(2) 失語症の有無と新聞・広報を読む習慣

新聞と広報の読む頻度を「毎回読む」「時々読む」「読まない」の3択で尋ねると、大多数の人が「毎回読む」と答えた(図8)(図9)。一方、失語群は非失語群と比べて、新聞($\chi^2 = 8.611$, $df = 2$, $p < .05$)、広報($\chi^2 = 29.888$, $df = 2$, $p < .01$)の両方とも「読んでいない」と答えた人が多かった。

新聞や広報をどのくらい読むかについては失語群、非失語群ともに「興味のあるところだけ読む」と答えた人が多く、各群で有意な差は認められなかった。性別、年齢では、新聞や広報を読むかどうかについて統計的に有意な差は認められなかった。

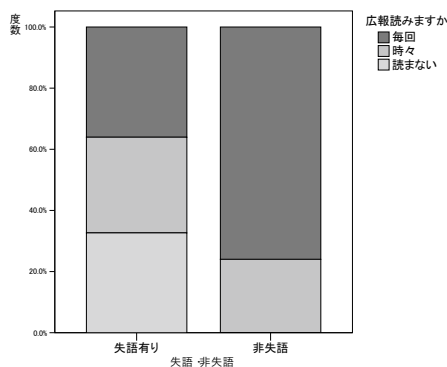
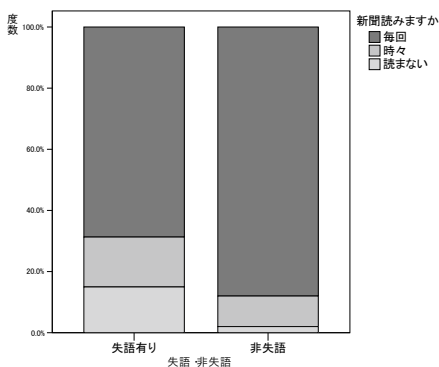


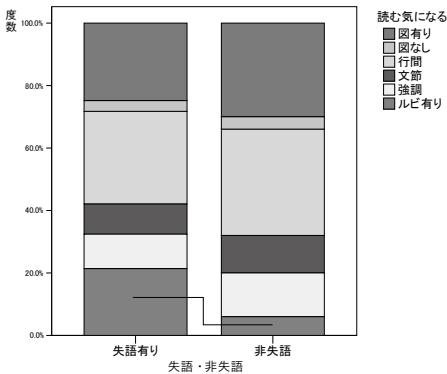
図8 失語の有無と新聞を読むかどうか

図9 失語の有無と広報を読むかどうか

(3) 読む意欲

<読む意欲が促進される条件>

失語群、非失語群ともに「読む気になる」として最も多く選ばれた条件は、「行間」、ついで「図有り」で、最も支持されなかったのは「図無し」だった。 χ^2 検定の結果、「ルビ有り」のみが、失語群・非失語群間で有意な差を認めた($\chi^2 = 5.948$, $df = 1$, $p < .05$)。(図10)

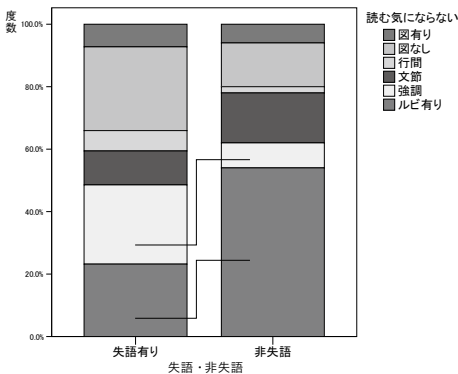


読む気になる順位	1位	2位	3位	4位	5位	6位
失語群	行間	図有り	ルビ有り	強調	文節	図無し
非失語群	行間	図有り	文節	強調	ルビ有り	図無し

図10 読む気になるもの 失語群・非失語群の比較

<読む意欲が減退する条件>

非失語群では「ルビ有り」が過半数を超えて「読む気にならない」と選択されたが、失語群では、「ルビ有り」は「強調」について3番目に多く選択された。失語群では全体的にばらつき、僅差で「図無し」が最も多く選ばれた。 χ^2 検定の結果「強調」($\chi^2 = 6.428$, $df = 1$, $p < .05$)と「ルビ有り」($\chi^2 = 16.944$, $df = 1$, $p < .01$)は、失語群と非失語群で有意な差を認めた。(図11)



読む気にならない順位	1位	2位	3位	4位	5位	6位
失語群	図無し	強調	ルビ有り	文節	図有り	行間
非失語群	ルビ有り	文節	図無し	強調	図有り	行間

図11 読む気にならないもの 失語群・非失語群の比較

<意欲を促進する要素と減退する要素>

「読む気になる」ものと「読む気にならない」ものの組み合わせで最も多かったのは、失語群では「行間」と「強調」、非失語群では「行間」と「ルビ有り」であった。失語群の組み合わせは、統計的に有意な連関を示した ($\chi^2 = 45.301$, $df = 25$, $p < .01$) が、非失語群で有意な連関を認めなかった。

<失語症の重症度との関連>

重症度0（最重度）（1例）を除いて検定を行った。「読む気になる」のは重症度1で「図有り」、重症度5で「行間」が多く選択されていることが目立つ。「ルビ」は軽度になるほど選択する割合が減っていく傾向があり、「行間」は、軽度になるほど選択される割合が増えていく傾向があった。（図12）

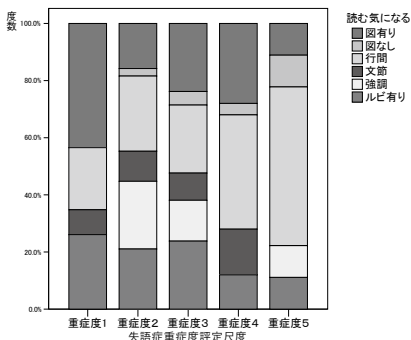


図12 重症度毎の「読む気になる」条件

失語症の重症度と「読む気にならない」ものの選択で、「強調」と「文節」は、重症度毎の割合の差に有意な差を認めた。（図13）

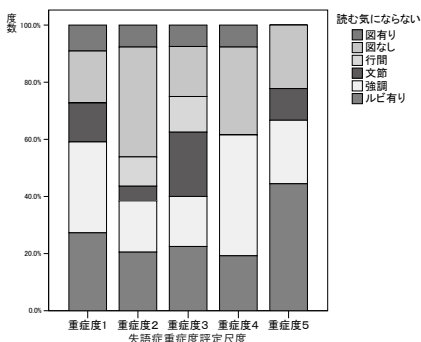


図13 重症度毎の「読む気にならない」条件

＜失語症のタイプとの関連＞

ブローカ失語、ウェルニッケ失語、健忘失語の3タイプ以外のタイプは対象者が少なく、かつ「その他」のタイプの被験者は症状の内容が特定できないので、上記の3タイプのみで比較した。タイプによらず「行間」は最も「読む気になる」として選ばれた。ブローカ失語は、非失語群の分布と似た傾向にあるが、非失語群に比べて「ルビ」が好まれる傾向が強かった。ウェルニッケ失語は、「行間」と「ルビ」を選んだ人が同数で、他のタイプに比べて「ルビ」を「読む気になる」として多く選択する傾向があった。健忘失語では「行間」を選択した人が他のタイプに比べて多い傾向があった。非失語群が「ルビ」を「読む気になる」とした人数の割合と比べて、ブローカ失語とウェルニッケ失語は「ルビ」を「読む気になる」とした人数の割合に有意な差を認めたが、健忘失語では差はなかった。(図14)

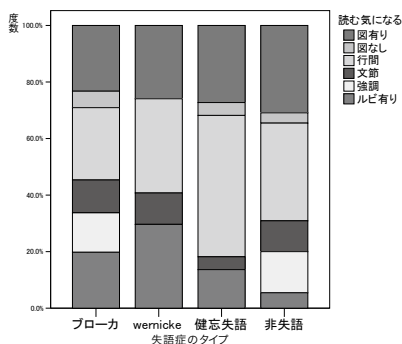


図14 失語症のタイプと「読む気になる」

図15は「読む気にならない」として選択された各条件の割合を示す。全体的に失語症のタイプの違いによらず選択された割合の傾向は似ており、失語症のタイプ間で統計的な有意な差を示した条件はなかった。非失語群と比較して「強調」が多く、「ルビ」を選択する割合が少ないことが目立つ。

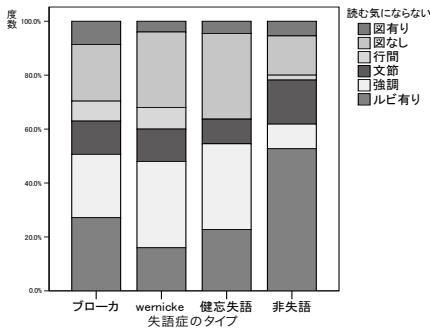


図15 失語症のタイプと「読む気にならない」

<年齢との関連>

「読む気になる」の選択で、年代間で選択した人数の割合に有意な差を認めたのは、非失語群「図有り」($\chi^2 = 2.267$, $df = 6$, $p < .01$) 失語群「図無し」($\chi^2 = 13.009$, $df = 6$, $p < .05$) であった。(図16)

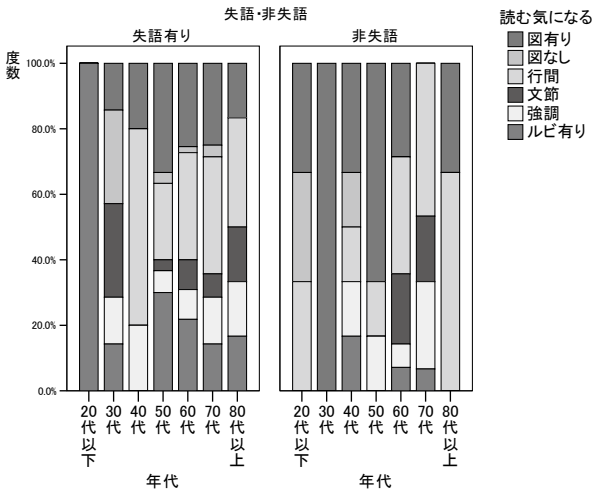


図16 年代と「読む気になる」失語・非失語の比較

また、「読む気にならない」の選択で年代間に有意な差を認めたのは、非失語群の「行間」($\chi^2 = 15.986$, $df = 6$, $p < .05$) であった。失語群では年代間で統計的に有意な差は認められなかった。(図17)「読む気になる」「読む気にならない」のどちらも、年代の変化と並行した増減を示した条件はなかった。

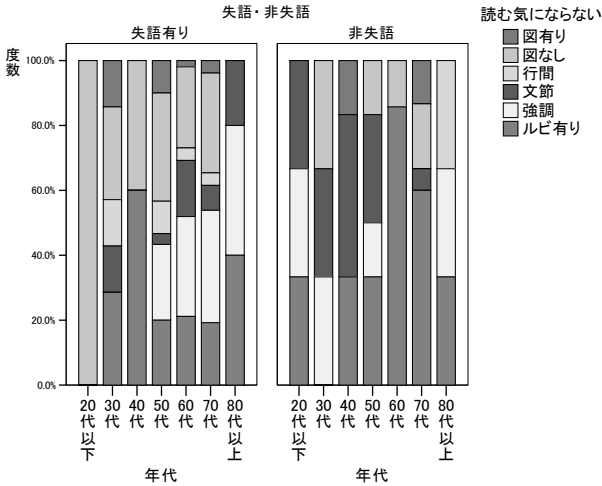


図17 年代と「読む気にならない」失語・非失語の比較

<その他の要素との関連>

性別、新聞や広報を読むかどうかや読み方の違いと条件の選択は、失語群・非失語群とも、統計的に有意な差は認められなかった。

考察

1 全体の傾向と各条件について

(1) 全体の傾向

今回の調査の結果をまとめると、

- ①基本的には空間があって目を引きそうなものが好まれる。失語症の有無とは関係ない。
- ②失語症が重い方が絵を好む。
- ③中等度の場合は、情報の追加（絵、ルビ）があったほうが好まれる。
- ④軽度では、視認性の良さが優先される傾向がある

となる。

なお、行間の幅の効果は、従来の研究では年齢に関連があるとされてきたが、今回は年齢との関係は明らかにはならなかった。

(2) 「ルビ」について

条件ごとの傾向で非失語群との違いが顕著だったのは、非失語群で最も敬遠された「ルビ」が失語群ではむしろ好意的にとられた点である。特に、ウェルニッケ失語では「ルビ」を「読む気になる」として選択した割合が、他の失語症のタ

イブに比べて多い傾向があった。

ルビのカードは「子どもじゃないんだから」という否定的コメント、「ふりがなも少しあると楽だが、全部にふるのではなく、難しいところに絞ってあるといい。」と言うコメントもあった。ルビは視認性と見た目の印象の両方に影響を与えたと考えられる。一方SLTA下位検査「かな単語の理解」の成績と、ルビを好むかどうかの関連は認められなかった。ルビに関してサンプル数を増やし読解との関連の検討が必要である。

(3) 「図有り」について

「図有り」は、今回の結果では失語群、非失語群共に「読む気になる」として多く選ばれ、Roseら（2003）のイラストに拒否感をもった失語症者が50%いたことと異なる傾向を示した。

今回用いた絵は、この記事のために描かれたものではあったが、文の内容を示すものではなかった。内容の理解には役立たないが少なくとも読む気にはさせた。理解面への効果は引き続き今後の検討課題であるが、使い方によっては絵も有効といえよう。

(4) 「強調」について

「強調」は、先行調査では評価が高かったが、今回は評価が非常に低かった。今回の調査対象者からは「かえって見にくい」という意見が多く聞かれた。

今回重要な部分を強調しようとするあまり、全体の半分近くが強調されてしまい、かえって行間や文字間が詰まったような、見にくい印象のものになってしまった可能性がある。また、今回の失語群の参加者から「難しい言葉や固有名詞だけ強調して欲しい」とのコメントもあり、「強調」は他の条件との組み合わせで効果的に示されること、かつ、強調部分と非強調部分の配分に注意が必要なが示唆された。

2 課題

以上をふまえ、今後の検討課題は以下の通りである。

1. 意欲を促進するレイアウトと読解の関連
2. 各条件の相乗効果
3. レイアウトを工夫する際の適切な量や内容
さらに
4. 読む意欲を促進または減退させる要素
5. 重症度とタイプによる違い
6. 媒体による違い

1から3については、今回の結果を受け視認性については健常高齢者の先行研究を参考にし、図、ルビ、強調の条件に絞ることができる。読解課題を行うことについては、課題の難易度、調査対象者への負担への対策が立てられず、理解面の検討を行うことができなかった。音読が理解の指標となりうることが教育分野などで指摘されている。ルビは直接の理解を助けるより音読を助けることが予測される。音読と読解の障害が並行している対象者に協力を依頼し、音読の様子を指標とすることで、理解との検討が可能かもしれない。課題の難易度については、日本語能力検定の教材を用いて行うという方法が考えられる。

4については、今回の調査対象者の一言に興味深い示唆を得ることが多かった。次回の機会では、必ずどうしてそう感じるのかを質問項目に入れたい。

5については、対象者の数を増やす必要がある。

6について、今回用いた素材はカード大の小さい記事一つで、ページいっぱいでは印象が変わる。より現実的レイアウトで検討することが必要であろう。

まとめ

失語症者の情報保障について概観し、失語症者の読む意欲を促進するレイアウトの要素について調査した。視認性の良さは失語症の有無に関わらず必要だったが、失語症者特有の傾向もあり、タイプや重症度にもよる可能性が示唆された。以上から「失語症者向き」のレイアウトの作成は必要で、失語症者の心理面にも配慮したものが必要である。一方、失語症者が好んだ組み合わせが、非失語群でも選択されたことから、失語症者向けに作った紙面の構成が、非失語症者にとっても読む意欲を促進するものになる可能性も含まれている。

課題は理解面との関連、相乗効果、改編の適切な量、条件の掘り下げ、失語症の状態または情報媒体ごとの検討である。

【引用文献】

- 1) 木村さち子・宇野彰・五十嵐浩子・加藤正弘 (1991) 「重度失語症例のコミュニケーション能力と身体障害者福祉法での障害程度等級について—聴覚障害例との比較—」日本失語症学会『失語症研究』vol.11(3): 44
- 2) 厚生労働省「障害者総合支援法が施行されました」http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/shougaisahukushi/sougoushien/dl/sougoushien-06.pdf (2014/8/29 アクセス)
- 3) NPO法人言語障害者の社会参加を支援するパートナーの会和音「コミュニケーションのバリエーションを！」<http://ww6.tiki.ne.jp/~wa-on/index.htm> (2008/1/11 アクセス)
- 4) NPO法人言語障害者の社会参加を支援するパートナーの会和音「失語症ってなんでしょう？」http://ww6.tiki.ne.jp/~wa-on/aphasia.files/v3_document.htm (2008/1/11 アクセス)
- 5) Goodglass, H.・Kaplan, E. (1975)『失語症の評価』（笹沼澄子・物井寿子訳）医学書院 1975

【参考文献】

- Beeson, P. M.・Insalaco, D. (1998) Acquired alexia: lessons from successful treatment. Journal of International Neuropsychol Society, vol.4 (6) : 621-635
- Brennan, A. D.・Worrall, L. E.・McKenna, K. T. (2005) The relationship between specific features of aphasia-friendly written material and comprehension of written material for people with aphasia: An exploratory study. Aphasiology, vol.19 (8) : 693-711
- Elmore-nicholas, L・Brookchire, R. H. (1981) Effects of pictures and picturability on sentence verification by aphasic and nonaphasic subjects. Journal of Speech and Hearing Research, vol.24, 292-297
- Kagan, A (1998) : Supported conversation for adults with aphasia: methods and resources for training conversation partners. Aphasiology, vol.12 (9) : 816-830
- NPO法人コミュニケーション・アシスト・ネットワーク (2007)「ニュース」No.17
- NPO法人言語障害者の社会参加を支援するパートナーの会和音 (2007)『和音通信』第4号
- NPO法人全国失語症友の会連合会 (2003)「易しい失語症の本」『言葉の海』臨時増刊No.72 2003
- NPO法人全国失語症友の会連合会 (2004)「こうすればあなたも選挙できる」『言葉の海』臨時増刊No.80
- NPO法人全国失語症友の会連合会「WEB言葉の海『連合会加盟友の会一覧・備考』」 <http://www.2u.biglobe.ne.jp/~japc/tomo/tomoinde.html>. (2008/1/8アクセス)
- NPO法人全国失語症友の会連合会東京支部 (2006)『ある日突然に - 失語症との闘い』支部報臨時号 増刊通巻第3712号
- Rose, T. A.・Worrall, L. E.・McKenna, K. T. (2003) The effectiveness of Aphasia-friendly principles for health education materials for people with aphasia following stroke. Aphasiology, vol.17 (10) : 947-963
- WAB失語症検査 (日本語版) 作成委員会 (1986)『WAB失語症検査日本語版』医学書院
- スージー パー・サリー ビング・スー ギルピン・クリス アイランド (1998)『失語症とともに生きる—イギリスの脳卒中体験者50人の証言—』(遠藤尚志訳) 筒井書房 (= Parr, Susie. et. al. 1997)
- マイクロソフト「アクセシビリティ」<http://www.microsoft.com/japan/enable/default.mspx> (2008/1/7アクセス)
- 青木慎太郎 (2006)「大学における障害者支援の現状と課題—情報保障を手がかりとして」立命館大学大学院先端総合学術研究科博士予備論文<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/gr/gsce/2006/0131as.htm#112> (2008/1/7アクセス)
- 朝倉哲彦・浜田博文・種村純・伊藤元信他 (2002)「失語症全国実態調査報告」日本失語症学会『失語症研究』vol.22 (3) : 67-82
- 安保直子 (2008)「失語症をもつ人の『会話の場』の保障—復職者を中心とするサポートグループからの考察」, 法政大学大学院2007年度修士論文
- 天野成昭・近藤公久 (2003)『NTT データベースシリーズ 日本語の語彙特性』三省堂
- 伊藤由紀・安藤哲朗・柳務・鍋島俊隆 (1999)「薬袋情報のための読みやすい文字と字体」日本病院薬学会『病院薬学』vol.25 (5) : 540-545
- 井上和子 (1989)『日本文法小事典』大修館書店
- 小谷朋子・石上志保・小林久子・野副めぐみ・田村洋子 (2006)「失語症者に関わるボランティアの現状と課題—失語症会話パートナー養成の視点から—」第7回日本言語聴覚学会ポスター発表
- 河原俊昭 (2004)『自治体の言語サービス—多言語社会への扉をひらく』春風社
- 厚生労働省「患者調査 (平成17年) 3 閲覧第94表『総患者数, 傷病基本分類別』」http://www.dbtk.mhlw.go.jp/toukei/data/150/2005/toukeihyou/0005647/t0125297/E0094_113.html (2008/1/7アクセス)

- 厚生労働省「主要な傷病の総患者数」平成17年10月 <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/05/05.html> (2008/1/7アクセス)
- 財団法人共用品推進機構「『コミュニケーション支援用絵記号デザイン原則 (JIS T0103)』に記載されている絵記号例の公開無償ダウンロードについて」 http://www.kyoyohin.org/06_accessible/060100_jis.php#ekigo (2008/1/7アクセス)
- 財団法人日本障害者リハビリテーション協会「障害保健福祉研究情報システム『知的障害者とメディア』」 http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/access/easy/LD_media/LD_Media.htm (2008/1/7アクセス)
- 失語症研究会 (葦山カンファレンス) 標準失語症検査作成委員会 (1975)『標準失語症検査 (Standard Language Test of Aphasia: SLTA)』新興医学出版社
- 東京都神経化学総合研究所「高次脳機能障害とリハビリ」 http://www.tmin.ac.jp/medical/06_rehabili1.html (2008/1/7アクセス)
- 独立行政法人日本学生支援機構「障害学生修学支援のためのFAQ (支援体制)」 http://www.jasso.go.jp/tokubetsu_shien/faq/faq3.html (2008/1/7アクセス)
- 内閣府政策統括官 (共生社会政策担当)「平成16年度高齢者の日常生活に関する意識調査結果の概要」 http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h16_nitizyou/10.pdf (2008/1/5アクセス)
- 日本高次脳機能障害学会 (旧 日本失語症学会) Brain Function Test委員会 (2003)『標準失語症検査マニュアル改訂第2版』新興医学出版社
- 福迫陽子 (1984)「失語症のタイプ・重症度と年齢・性」日本音声言語医学会『音声言語医学』vol.25: 1-12
- 綿森淑子・竹内愛子・福迫陽子・伊藤元信他 (1990)『実用コミュニケーション能力検査—CADL検査—』医歯薬出版
- 高次脳機能障害全国実態調査委員会「高次脳機能障害全国実態調査報告」『高次脳機能研究』vol.31 (1) : 19-31.
- 失語症全国実態調査委員会「失語症全国実態調査」『失語症研究』. 日本失語症学会.
- 千葉県. (2009年12月).「障害のある人に対する情報保障のためのガイドライン」.『障害のある人に対する情報保障のためのガイドライン』の策定について／千葉県 <http://www.pref.chiba.lg.jp/shoufuku/shougai-kurashi/jouhouhoshou/documents/guideline.pdf> (2014/8/30アクセス)